北條五代記

巻八

ヤ一号

江浦俵
野一房

北條五代記巻第八之目録

物見の武者參る事

北條氏康智仁勇の徳ある事 付 實朝公の事

關東侍老て今參をわすれざる事

連歌碁小具足の事 付 北條幻庵の事

相模小田原町の事

異名を付侍の事

東國山嶽に根城をたつる事 付 大伴黒主が事

北條家の軍に貝太鼓を用ひる事

大亀陸へあがる事

北條五代記巻第八

○物見の武者かまれなる事

見しハ昔、或老士物語せられしハ、むかし小田原北條家にをひて数度の軍におゐてハまづ敵味方対陣の時にしく物見にまかりて人の先に出て馬を調練し。ためしの案内をもつて功者を専とし。物見の武者撰へ。其日の気しきを見合せ、ところを見てよき所へ懸上の敵の軍勢とたちはあて備陣をなされバ大将軍出馬し対陣をとる時ハ敵も味方もその役ぞして。

童男の兆法むかしに語る事

夜まへの道程も遠目へり。常まふ動く敵をよう
うかひ朽ち門さしたぬる色と常また見びた名付
見まりし物の為の畫まで敵の事を見ると動ぜ。初
見の武者ども目をつくる時は常まなうて旗指
をも気さむらいとも一己を数ふ動く備馬廻者
とかくし野へも山へも家上よせる事に意く
業の内にもなくては計ひがたし。陣気の事たとへ
敵まで水をひとしく大山の林ぐらさの地大
河のもさ。森の陰うしろの数おとさうし。魚鱗
鶴翼の陣をとるかたしの義は武者なり

下知もとらへた。指し物見の為め者なくる也
一所の陣ならも堅塁まもりもとせまさ
まさら勝べきは。それより勝までに出はべる
けるのでぞてなり。天正十三年の秋の頃
義宣と下野国において対
陣とも東西に旗となびきと氏直旗
すまり物見と見張りつつ、遠目を
家出し敵の軍旗をもちむけよ。も内よ山
上に右衛門尉波賀衣十郎二騎ばかり出の
陣内をよく見まるなりや。遠を一町ほど家

もどしけるが紀而へ乗よる。敵の草毛と见へけれ
のがさじとおもひて二騎の武者をおしはさね
まさじ。綱にかけ奥乃かたし。左右無射向
をばおさへられ。敵地へ入てかたをさ
しむかうて打あひ其場をのがれ。跡に
とまりて手をおさへ草刈たるがにげゆくと見て
なし。躰く打取首をとりて。敵わきへ
こゝへ来る。其馬達者なる躰。大山へ乗上り嶺をこし
味方の地よりきたりて。其十郎八敵によりて
まれ落べきさかなく。敵はまぢかく乗の境

深さ此道をとをりて。しかれどもより南をさし
其うへ駒にむちうて落行を陣中より騎
まだ深く乗出し前後を丸切或は乗
付けんとすれども。馬をとりもそ一二日
三日馬ともに或はよんで首をもとれば。
馬よ教をうけて。はせすぐ殺しあやうくさ
えしが絶よくされずして大河へ乗入馬とも
よが陣。なくの岸に付。民百人の
ちさの深さをさわしめ。流識かくめかくまじ
諸侍うんせきどと云事なし。扇がそ百人

それ前にめされ。御出ありしとも。せさ。山上三右
衛門尉敵あまたおうさせけれ。戦場をかけ
多のことなしまで。敵一人討捕。大山をさして。後陣
もる事なし。則あして馬も乗着せられ。軍
中のかまれば。執なる紀るなり。擬又此方へ
十郎の敵りよくしめられ。そんかなたに紀が。て
陣へかると家へ。隠れさひの帆縁を発く。首を
さしてもせよ。そ上又條中より。おまえの縁
馬より出あひ。被あ雑義はどよふわり。擬
云とふうひのれしゅも。討まはまで。大河へ家

へ。敵味方の目を驚かしつ。これらの先ぶれ
付事。前代未聞の剛者也。いまだ人首を取
ずる三右衛門が武勇は。流星がとりて感さりる
ぎりけるぞ。此者のうんしやうとるく。おる井氏
ことに名馬也。是へ經州あるを井郡より出て。擬又
多胡河原毛と号せし。是は上州多胡郡より出
ける。此二疋の名馬を無類とうせ引立。波前に
をつて当国のれ力ひとるく。故人ね並て
一家は是を乗らせと。諸将是を感じ。前登を
のぞむ者は。鍛錬なくしてかなふべからず也。

いよ〳〵弓馬の道をはげまれ給ひけり

○北条氏康智仁勇の徳ある事　付　実朝公の
哥をよみ給ふ北条氏康天文十四年上杉憲
政を平井にせめられしかハこの関八州に威を
ふるひ給ひぬ然るに上杉ハ越後の長尾をたの
もしくおもひける十六年の夏景虎上州沼
田へ発向ありと聞て氏康出張ありしかとも
越後へ帰陣ありて明年の春に
景虎ハ越後へかへりけるさて沼田に
ハいまだ城もなかりしかハ太田美濃守ハ

岩付の城にありて景虎を頼むといへ共かひなく
して城を開退て落去せり
上杉を切すてられて身のてだてのみ
条の家とてもなしとてこそ上杉上州に
後上野下野武蔵信濃にをいて城を持
名ある武士皆浪人と成て氏康幕下に付随
がたく上杉越後へ落行ぬしかれば関東の諸侍
一度旧君上州へ帰国を待ける内に佞人ハ
さりながら叛逆をくはだて文をめぐらせしかば
皆それに付したがひて或時ハ景虎に属

しが此時ハ信玄にくミせる故。をいさかひけるに
永禄三年の頃かひ景虎相州大礒まで押合日
十二年に信玄小田原の城を取囲ミて有りしに
此とき氏康一城せめ落までも取てもかゝる一時
をゆるくしもなし。其まで一時の内の雲をさゝなが
して後をとり信の晴たる事なし。何の益
もなふして我国へ引かへすとも。かの氏将小田原へ
たてこもる事ハ関東将も一味し。氏康へ是
んわらしゆへなり。されバ人かれらが名をとバ一気に
清せしも我一人に手柄の無ろふにいひたせける。

世人評判に申けるハ。北条氏康。輝虎。信玄此三人
の大将ハ生れ性けなげにして。猛強の大将
なり。然共弓矢の取様ハ各別也。輝虎ハ合戦
の度毎に。鑓を取て真先に進み。郎従等
緒に後れじと下知し。我先にと乗ちらせる
事なり。是ハ小勇の振舞。大将にハ不覚
のあるべき事なり。信玄ハ強盛に慈悲ある故へ
戦場に向てハ。味方の様になしを計る。郎従等
に下知し。敵の手立をはかりて理に従ひ
よく忠に察して。行を地に弓矢を取る故

いはゞむねハたゞかたりをもひらく武威をかりは
ありし前をおもひて後のうれひもなく血氣
の勇を振舞ぞ一也民康ハ智仁勇の徳
なくおほく弓矢のわざをよくして計て敵
をもふれたさハいまだ武略を用ゐておさむべし
の國を切てとらんと智謀をめぐらして関
八州を永久に治めんとかゝハ天下をもちて上切に臨ん
でハ自分の鑓を取太刀打し我は力にまかせ
木の太刀疵なく猛大将の誉かなし二ヵ國を
わすれずといふをそかりてとらへ信玄輝虎

強勢にまかせ雅をとりて政道をみだりにし
ことに民をよせて民康ハ慈悲をあつくして民
をなづくる徳ありて終始かはらず文武智
謀をよく兼て忠臣をたてゝ敵をあざむかず
あれどもよく士卒をいさめて其の大なる時は備
國をおさめ職をかへて人数をこめて敵城に
ことなるとことにわたくしておもふなれども
みえて互に勝事をもつて大勇なる上武
信の逆臣の名を一度ハ氣づよく信玄に属しと
いへども猿梅をもつて後民康を

悲とぞいはず。安からく。忠臣を誡し。讒
佞の諸侯二心なくば。人々は命を捨。忠をい
たさんとせざりし大国は大王なり。武勇の臣
下におゐて中にも名高しと云臣下をめし
て。仰けるは。なんぢ金は。七珍万宝一つとして
不足なるものなし。然れどもびの国の市へ
行て宝を貰ひし。汝海行てわが金はよろこばん
宝を買来べし。それゆゑ。たれゆくものなりとを
我せんぞよりのちやうしは市に行て見るに。
一つとしてなきてかの物なし。されば王宮に
善根なし。是を買て来たれば国の貧人を
集て。ことごとくをよびて手形をとりて
しくことく焼すて。大王買ふ。聞の珍宝を見ん
ことなかれ。などやうし答て。御蔵の内にも珍宝
一つもなし。然れば王宮には善根なかりしかれば
国の貧人を集て施しとらせ。善
根を買来りと申。大王不思議に思しめし
かれ賢人にてありけるものなりとほめ給ふ。
其国のえびすをおこして。大王合戦に討負給ひ
国をうしなひ。諸の臣下人々の恩を

捨て給ひ其賢王一人に限らずとても自害(じがい)
せんとし給ふ時にやうしが云。忠をつくし給へ。
此国の市中に賢人(けんじん)善根(ぜんこん)此ひまに見
なとて行を主とえてし貧人の中に。
志有とか云ふ武勇の者善根の心ざしと感じ
てかれらの為とてはひとへに王のために城郭(じやうくわく)を
おし立てこれをまもらせて守をひらき。
二度(たび)国へ帰りて事を。先偏にちやうしが賢(けん)を
ささへて善根の功ありと。国王感(かん)じ給ふ。一人
当千(たうぜん)といふ事。此時よりもてはやされ是を明すと

むげ失(うせ)しける人の臣下(しんか)。又出てくれんといひ大王(わう)
いかなる。又事出来(いでき)たりなばいかにすべし。別心(べつしん)をいだくべし
しこのまゝにてやうしが云。別臣かならずしも罪なる
なきすとの。むげ失(せ)し。旧臣(きうしん)を召仕ひ二心なき
恩(おん)をわすれんやと云。大王おどろきてまことにとて
の臣下を召出しおとゞめて召仕ふ時に又
国大きに乱(みだれ)起つて。王位(わうゐ)をあやふむ時。かの
ゆうりあるの臣下。二度の恩をかへりみて。身命(しんめい)
を惜まずせめ戦ふ。されば勝事を得。王の
位を長久(ちやうきう)に治め給ふ。民家のさかへけるとぞ。

又是よりなじみよ年をへて他国をしたがへ武蔵。下総。上総。上野。下野。常陸。八ケ国を治め給ひ駿河の国のうちをも切て取。遠国の逆徒を討平げきし京都へせめ上り天下に旗をあげんとせしさかひのいかにしてか病しける氏康は元亀元年庚午十月三日。病死也。氏政氏直両代まで。東西南北に敵ありて合戦せしを以て関八州静謐に治め。氏直両代に至りて安房の里見義頼和睦し。小田原へ浪人と成し幕下に付甲州武田勝頼。常州佐竹義宣。敵

とかくかはりてもちひをんせし。然に勝頼は。天正十年三月十一日。信長公のためにかかるび。さればさかひに滝川左近将監西上州に在城。厩橋の城にありて近辺の城主をしたがへ。幕下におかれしが本能寺にて信長公同年六月二日の御生害によりて氏直上州へ発向し同月十八日滝川と合戦し氏直うち勝て滝川を追討し。関八州静謐に治りしかば北条家武運長久なり。天正年中秀吉公の武威盛なるにより。関八州の軍

共に小田原に籠城し給ひしか。城中堅固なり
たやすく落まじかりしに。和睦ありて。氏直。相豆の
三ケ国をそへて。前々のごとく。氏直に渡さ
るべきよし。秀吉の謀計にかゝりて。氏直卒
爾に出城の事。天運の尽る所也といへる人
ありしに人のいはく。氏直関八州の軍兵を小田原へ
集めて。一合戦もせず滅亡する事。後代の
恥辱なりと云。老人の申されける事なり。
それ君子は武略をもつて。敵をかろしめず。唯
を治むるを天道とし。運は天道によりて家

わざをなすといへども。善悪とりがたかるべし。
運尽る時は善たりとも悪也。昔平氏
の大将軍小松の中将維盛朝臣。数万騎を率
し。駿河の国まで下。富士川を前にあてゝ陣をとれ
とも。夜半に沼にゐける水鳥の群立の
羽音を。ひとへに軍勢のときの声と思ひ
夜中の事なれば平氏みな騒ぎさわぎ。矢
の一つも射ずして。逃げ去り。兵具をおとし。
とる物もとりあへず敗北し。運の末には
終に国をうしなひ給ひき。相国清盛入道。

世を治め廿余年終に東国の源氏発向にて
て軍兵をもて鎌倉へせ城郭なんどゆへ平
家の一門ことごとく都を去く西海のみく
ずと成給ひぬ平泰衡は出羽陸奥の支配さ
れ頼朝公奥州出馬ありて程なく城郭
とかまへて入ぬ廿日の内に滅亡せし頼朝公天
下に威をふるひしより関西にをいて一城な
きがゆへ家人の日向守に賀州を恩給せられぬ
終に民安くめぐりて皇の大城を構へ關八州
の民百姓までも鎌倉を天下と引請百余ヶ国

世かはりしより程経ては落城せず終に永のあつかひ
あらそ小田原没落して翌年より京都への
ひ駿河の府中に町を門まへよ大なる城
せんゐはりぜいいの城事をし向駿河に中村
式部少輔氏國より去年小田原の城之
まへるにて落城せざる無見当出見る鏡なり
さて府中の城もまへの城とぞりしめ
にもといひこれより東までも海の城をみな
まがまへの城普請ありつるを見てより今も
なつて終に一方一代の出世も天のまもり

なくしても、かくし。頼朝公三代も皆十年よ
なくるかぞれば北條家は早雲氏茂延徳年
中伊豆の国へ打入りこのかた民を子のごとくにして五
代百余ヶ年関八州を静謐に治め都鄙
の武家なりて、まれなる事とぞ云へり。世に
一も学ぶなくして馬の轡をとらぬ事。年
治の合戦よりこのかた思深き道理なりけ
為るとかや。扨又小田原並びに十八代
後世の亀鑑ともなりける事、見わたりて
運命のはかなさは功をかくしたるとぞ理なり

人纔を雖せらるといへども人は盛者必衰のことわり
多ゆえなり。古今常の理也。是を理方すに及べし。
善悪其それぞれ是非真実の道理なり。
扨又運命のがれがたき事なれば、わかれけり。前
滝会の将軍北条家は御全才実朝の為に
滅亡しかれば北条家は二人の君是わが長君
を害せしれども是とは左の盛不如家に
し公激備は貞暁の御弟子となりし。阿闍梨公
暁と号しも成人しての後に法で祥庄。公暁と
しひかし。露の別当織りよりそして

後鳥羽にて神託ありて阿闍梨宿願の後よ
て一千日参籠せしめらるべきと云て。終に将
軍家右大臣に任ぜしめ。是に依て。建保
七年己卯正月廿七日。右大臣拝賀のため。
鶴岡八幡宮社参の刻に出家へし
とのよりかねて門にて供奉集まりて。この
頃に当て。慶賀一寸もあらず。前大膳大夫
覚阿申されけるは。覚阿成人
の後は未だ涙の面にうかぶ事を知らず。
然るに今。眼に落涙禁じがたし。

是までは事うるはしく見えて子細あるべからず。然るに
東大寺に供養の日右大将軍の御出の例により
かねて御下向の時は御腹巻を着せしめ給
はしと申す。文章博士仲章朝臣が申しけるは。大
臣大将にのぼる人は。いまだ式の例なしとや。次に
武縁と思ひし給ふ。次に宮内兵衛尉公氏御鬢
に候ひて。御前において御びんの髪一
筋をぬき取り。記念とて給はり。庭上の梅
を御覧じて。禁忌の和歌を詠じ給ふ
出でいなば主なき宿となりぬとも。軒端

の楼に甍を見まハし。次に南門を出玉ふの時
霊鳩来てかれ鳩は飛へ行る。右大臣車より下
給ふの刹。雅楽にされらるゝといふ。将軍家
寺の楼門に入しめ玉ふ時。右京兆義時朝
臣と共に従ひ。俄に心神違例ありて。御剱を
仲章にゆづり退出し。神宮寺にまいる。
此神拝事をはりて。夜陰におよび退出せ
しめ玉ふの所に。当宮別当阿闍梨公暁
階のきはにうかゞひ来て。右大臣をおかしたて
まつる。首を引さげ。後の山にへかくる。其の

後鳥羽上皇は世をおとし阿闍梨と云も。次の日にお
ぐ。勝長寿院のうしろに葬てる。是より
てまつり玉ふ。秋の御首の代りに。文弟不
具なれども。ふくろに入て首の代に葬る
此髪の毛一筋を御首に用て。棺に入る。となり
あり。諸人へ申して右大臣ひとりの御身の上を。権との
怪異なる事。不思議なりと申しておひ。大膳大夫
覚阿が落涙をいかなる悪妖ぞやとかつて
も二位殿へ申し。頼朝の後室北条時政が女也。頼朝公
薨じ給ひて後。頼経まで三代のちかいろそろ

謀叛の侍あつめて国をみだしたまふゆへにかくぞか
ならしむ。二位禅尼は乱逆をおこしたまへる入道殿。
承久三年。官軍をやぶりて。後鳥羽院。土御門。
順徳院をうしなひ奉り。島へながし。天下のみだれを
しづめたるは。ひとへに天地開闢よりこのかた。女性の中
には比類なき智女。日本国をたもちて後の世までも
まで也。此ほか実朝は阿闍梨公暁の親のかたき。是を
一度ほろぼされたるは。実朝公一代是一ツのあやま
りなりと云人ありけり。扨又阿闍梨公暁。前の如くと
いひとも一千日の気散。まことうしろめたさ

もろこしならひと云もわれら義時は遺例
仲章に此綱をゆづり奉るは宣命に
仲章ならでと云もゆゑ。右大臣門出にまじん
のうちを一筋に公氏に見せけり。扨実
も一筋。首はなかりけるも葬られけり。実朝
公は名人。二十一代集の内にはいれり。
鎌倉右大臣とのせられけるは実朝公の事也。
梅の歌。勝負とやいさん此気ちがひさや
きさんずくみて此池もちありし。是も中に
老人云々る此後批判もありけるが。是

天道の志めもと民にまく人。心のをよばず民あはれ
ども運命の如く是非を論ずるまで
とゞまり。
○関東侍兇て今参をわするゝ事
凡そ昔関東乃諸侍の出来なくして国郡
を持ぐてし。古跡は常の廣言なれども。右大将頼
朝公このかた。親におよびまで。譜代相傳の
分限二示然命のわが安堵と。誰人うかゞふをを
家人の所領もかしかれども。越境違乱未練の
族あらむとなりてわが所公のつまへ計をせられし
なりされたる者乃境をわすれては。敵味方ども
名利てのみくし乃弓矢を取立て所々は城郭
をかまへ。それぞれかわり道る武功をとげまし。功
を全して先祖を祭り子孫繁昌を守り。而
功の上下を。指宥せんと文武をあるとし。猶ふ。
上りは義わきまへ下々不義なれども。命をも蔑
よりも粗くし。先よはする時ハ人をあやうし。後
かよはる時ハ人は意やうせしかども会計文なは
為といひて勇氣をあげまし。義をある
をさる門思貞なる雑りたる人々也。田畠をた

かへとめもくろおはせぬ鑓を立並べてもみえけるを
旅を遮し出す弓鑓長刀を引さげて走り出
出まじく思ひける人は取物もとりあへず家の子従どもあつまる
まじりの枝を手もとにとらへ打ちけり馬より徹
うつくしげなる人を乱しける大難を
ふるまひなりし隣国隠岸に手ありく知らる
中たがひの恥辱のおれこし名字合ておもても
かくも一道もむらむとも名を打しこ死をとかしそひ。
あのおこたえ給ひつゝも他にさしつかへせめ首を
取つらしひて血をそらしても出してやすなる事国を

東西南北にまでよいぶ北條氏康時代迄の事なし
ご浩きの若き人ゝ分てたしのいくさはんじこそ
おもかいは家に侍をれば久しく古淫を推り今
悪すべきは当世新造の淫乱をびいしるれといふ。
むかしいかでよろしきひとを悪とする事。災ひ濁るそ
もよはでなりひ出せり。鎌倉殿の将軍の時代。兼久
元年八月八日殺生禁断の時中にある
将軍の帽別武列廣元紹してる
ける武衛の服。かんひは痛癖とにく。然
ふ江の中に吾妻四郎助光といふ者なし

てあれども。行家をもつて卿となれくこそ。助光
さもさせる大名にあらねども。只党ハ累家の勇
士のためにハ是を召加られ年ぬ事。西面と成
せらるゝを誇りに思ひてありける事なり
ひとへに是ハ助光謝しまうしていさゝか。それの
義を守るにまかせ。勇意ある所の濫觴の始と
換とくさものゝ為を失ひやしさへるとぞ。
かさねて卿よりいよく。晴の義によりて。更に撫
しける事ハ若輩の違の濫りもれて継へしもぞ。
頼義ハ。行粧をかざるべしとぞ。されど駿足の

ためなりければ右大将軍の御時より。譜代
の武士ハ勲功して。役すべき出仕ならずと
武勇の誉をきて濫觴一般常せられ世上の称
候ハ継父の抱にや。門ハ累祖の
濫觴相伝なき紀に郷なれば中に流れて経例
の神事也毎度新造せしむるにいかで継
紬の縁しづ着の尚後ハ備人ひ義とちるべき
とてハ助光ハ出仕を停めらるゝ所也
同年十二月三日雪見の散策とじハれ相州の酒
宴。相州大官令等を召しせられけるに鶴一

相もんでんの上にて良久へが軍家にくしとせんを
ふして伴の為と討ざらむべきかの中にもと作を
さるに入りに於て武士嫁るべき討よりは入中に於て非せ
ど相州申されて云、吾妻四郎助光は乱を
とうしかの事と然へ申さんためにお当時は入りの
遠慮なはるが是とめなるべしさきしよりては後
とめるはさるての君。助光家を点じて奉上とそ。
蟇目を指そなくて落ざらしの洒ゆかしてひよ
て。矢を発は矢ためよりてなるやうにおお見ゆ
あしとえ先に鷺は海上より出。助光是を遠え

左の眼より血はさゝか出死すべきの疵にはあら
ず。さ矢は鷺の羽にて飛ぶらそや。為の目録
蟇て。整ゆと云く。助光畠て相計にまだ死ひ
なし。生存是を討ぬも行末。まは盛持よよ
あてざし。かのごとく眼を止めするべきの中。得お
かるのおわしど。万湖を下し給ふ所なり。
心義をたてしふに。古證あるへいよくもて武
士の名誉なり。粉又とハ天下泰平。弓矢お
さまりて。永久織よりてかんが侮将て待ろ
ひるがしくなる。かんこ毒出てあるおどろね

治代とてハ治べしとて天下無為に属せし上
侍奇ハ朝廷公家のもてあそぶ所。武者の弓箭
を武家のたしなむべき道。早にハ身を修
むかしを忍ぶ鞭ふつハ義を具せんこともあるべし
是名言也。史記に天下泰平たりといへ共。
そのひとはつてことさんハおやうしさつみあれは
文武の学びをすてつてとせり。淮南子に一目の
わなハ鳥を得べからず。餌なきの釣ハ魚を得
がたし。士をまねくに礼なくんバ賢をえがたかるべし
是に賢に任せ。治世久しかるべきを謀

とはんと利を求とくに。人土量の珍宝を
中にわかつ利をとるとし。義をわすれる時は
六親の孫害を中にわかち。是によりて語大
名今智仁勇の三つの徳を兼て。乾を
道に守る武士とぞ名付ふ古哥に
深山にも出くや君の治まりて。空の錦
今もわりせば。とこみてしとも今なれば。山王
尋く三十年心の裏関東是乱の時義義を令
石よりもくて命を一塵ともいはず。一刀絶を
出くる一生ものなれし。一人当千の大剛の武士

これかうのごとく年ハ六十七十におよぶといへども。諸大名へ召出され。知行を拝領し。老て今生の面目をほどこし。後代に名誉をとゞめたる功者孫子とよぶこゝろや。誠にまさしき武士の威徳。此人々にあやかりたやと。当代の若侍衆執着ねがひ給ふと見えてそうろ

○徳斎碁に與する事　付北條幻庵事

見しハむかし。相模小田原町に。徳斎といふ碁打有り。碁はうちて後にハ。餘念絶念をと忘れと上與をあつかれどの。ときひてあはしゆさ

爰に小田原において北條幻庵といひて。文武に達せし老翁あり。此人ハ早雲寺の末子也。幻庵徳斎が碁をこのみしやさしみのび。名誉なりと思ひ幻庵ねがひにより。かく碁をもつて。徳斎と碁を打給ひぬ。此着一段の様ハ末期に描いてとめたり。二番三番打をつる時分に。幻庵しぬるを見て。付ておきさ打徳斎へ。徳斎見として。くらゐわ備たる事に徳と名をたまはりて。拍子を取てくるやうをのりなでいふことを。時幻庵ひざをたゝき。手をならし。笑義にて。幻庵への言ハ早雲

子なくひさしく絶えけれバ、竹斎肝を見て、
真似をもつて見せけるに、それより皆人の碁
盤ハことおもしろく、備だに小細といひな
らハもとは幻庵より始まり、物毎に名
人と名をえし絶へけり。これを時節伊勢海中なる。
浪人なりて小田原に堪忍なりし人より幻庵に
どかひしに、おもしろくある物語りの事名人の
紙の戯とく、当代の侍気見ひとなりしを
法又ハもやめしかバ、幻庵ざりの足ハ、よく法
人竟を学ぶ術の切口りどさかどの秘事を

まじりとハ人ことなれバ、是非とやくし。
然れども幻庵切の足ハ名物とて大名衆多くよし
世にはまれなり。故又ハ時節、後の浜さ山桜の
く石盆をやりとり。法人始まる山をび見谷
めぐり、岩崖なりしさ亦もおり、めづらしく石名様
の新なく面白く玄翁をとりて山のきとを飛
ぶ事なり。又幻庵流の石盆とく学ぶ人ありしが、
磯山にて丸石を見出し、其拙者亦むらう穴を
かりなみのおもしろさ風情もなし。されど心を
人ハ是を学び給ひさ、石盆の手さぐひ、捐摸

小田原にハ猶のこりて。今もなをあるべし。此幻庵流の茶を
のまる生れつきの名を。自ら号をとりて見ん出し。
自然の山の新なりかれしも後ハ心を付くくして見
まで。実もなかりしを後くハ絶えずおかりの称。
なりしさ風流りてかくし。第上手藝。幻庵紙
まろ石巻ふ。これらまて。此人後ハ箱根泰府山
金剛王院の学堂を将。宛備のある師たり。天正十
七年十一月朔日。九十七歳りして逝去なり。法名ハ
金龍院殿明岑哲公大居士と号を。早雲寺氏茂。
春松院氏綱。大聖寺氏康。慈雲院氏政。松巌院
氏直まで五代ハ。位ハ武略をとりて。君をたすけ。仁
義をかざらず。天意にかなひて。おそらくハあんの刻にな
りやをもちてびくハ順をとらずハ。即身成仏
の瑞相をげんじて。浄土のさかひまでいたりしとぞ。人
沙汰しける

○相模小田原町の事

兄し。ハ昔伊豆よりこたちく東の国の人ハ。放蕩
風情。言葉音許までも田舎なまりさくく。ここ
くれハそてるる絶え相模小田原生れの人ハ男
女ともに形義さやうかん。万田舎びまたぞやさし

かりき。是ハかれらが不忠義也。然るによりて
諸侍仁義をたつとく思ひぬる浪人〳〵は皆そ
小田原の風流。関東の人よりハ子細なるべし
早雲。山城の国の人なりしが駿河へ下り。その
後智謀武略を以て。伊豆相模を切とる。
小田原に居城し給ひける比。京都の人みな
へつらひける。早雲の父。伊勢駿河守照康は
文武の道を思ふて。世に廣く流布する人の子
孫なる故。仁義の道をたつとせり。然れども年
秀吉公。武威をふるひてしかして西国をなびけし

武将に随ひけるより天下の人〳〵とおそれ随ひ
京なれば。関東北條氏政。代々して北條美
濃守氏規上洛し給ひ秀吉公対面ありて国会
侍とし。北條家の礼義の次第厳重なれば然威
京の世。義照らる下国のありて京都所作りと極まる
みて都を出す。されば小都の風流。此ことも
なりとはかられければ氏政は今国治り天
下一統の世なれば都鄙の往還繁く
かくて小田原町作り草の庵多く都人の見
家同もつらしく然ども皆板ぶきなれ

事叶ひて先海辺の町西のはしにしばらく
と二挺は板ぶきにて仕るべしとふれられければ
通町の見世棚の躰をそろへ板ぶきにしつらひけるさ
れば本国他国商売として出る者の町続りと学び
今の小田原の町となりんと貴賤男女群集して見
物せしところ是は関西商売出きてしばし小田原ハ
関東一の繁昌のちまたとぞなりしが今に絶へは
御さくらるぞや東国の風俗ゆかしさたてさ
事おろかなる見るく押はひしまされ見るさ笑ふ。
うる人なる人出来て。道なるいは事しぞや一方

さきの一たびはいとそなはる世のことわざを記
もすや此のごとし咸陽宮とては秦の始皇の
内裏なり城の廻一万八千三百八十余里。わけては
廣さ三百里あつち五千里の濱の築地の中
お鳳門とくぐ宮をわけられ通さるる始皇は
雷におぢられしかれば雷より上に高きまんと
て咸陽宮の中に九つのてんを立。東西へ九
町。南北へ五町。高さ三十六町の大床の上に
まことに小は五町のやまをかさねて立ならべ
庭には金瑠璃珠の砂をちらし金をとも

則て目を終り。浪をもて月をとゞこむれ共。か
かゝる目出度御家を終りてぞよく治ひける。
されバ呉融といふ人の詩は
ひさゞり淒涼眼前の事のミにわたるまじ。
咸陽宮も一炬にて則灰となるとも終まで昔
頼朝公鶴岡鎌倉にましまして。天下を
治め。関東繁昌のおびたゞ敷事も鎌倉やう
さく。諸国より是を学ぶも後数百年に及
それより弓矢もて時代うつりかはり。然れ
関東諸将仁義の道のおこなはるゝこそ目出く
されバ今は国治り御車武州に於て猶も繁
昌なりしかバそれより是よりして何事
も関東風なりとて。天下において江戸の風
流を学ぶ。古今東国目出度子細の至り
なり

○異名を付る事

見しハ昔。天正の比かとよ。駿河牢人に廣野武
蔵介犬山玄依介と云者相模小田原へ行て浪
居しかに友人の来る。其座に首捕人ありすぐれ
たり。浪人ハ此首を取て異名を付るとて。いろく

沙汰もなきせんもなき人の上をいふ事の外常にあり
なりひぞりし一人いふなるは。さしたる事もありけり。
武蔵の國は山なくして。廣き野原なれば。續古
今に
○わか人みどへどりてゐれれなしかのいく日に
なかねむさし野の原と詠る哥の心なり。廣
野武蔵介と付けるなれ。又庭前の出来土
佐我見とかゆき山國なれば。大山土佐介と名
付けるやと云ありし。宛も有る人言とく。いやいや
終りては何れも。廣野が好きなりしが此波野

おはしてはわかし。三國にわたる純生もる。孤もし
野をとしたすると求めれば。下野介たる浅
野介たいひてありし。梅又大山中となりしは稜
河に合る。苗土に合ると名付べし。それ死の吉意
をさゝちもる。ゆき人の。ふまいさ者の心を知
れ。讒言と云藥をとりてふまなんじ。又良醫
されぬ病をは見。脈をよく知りて。其病の名を
さして後あれあるが。振舞を見及ぶよし。俗にいふ
徒ら身よく人をほさるべかりきし。其上見しもせぬ事の
まがけなけれぞそのこ深る。これ推するはむかし

土佐房昌俊武蔵房弁慶などいひて武
勇人にすぐれたる名をえたる法師武者あ
りとや今も此名を似すべし。俗なるハ
坊とはいひがたく介と名付たるは著たり
駿河なく武蔵のまがりきてや異名流さ
流らんとてへばきおろしなしと云根して小さ昌
俊小世弁慶と沙汰しられべのがりて云義
なく当人無電もせ異名を付てハが風見を
わるハさんとぶふハひがな事也。もと北條氏政も
星見義救にとてるひの時節。敵味方の中よ。

大膳と名付る侍大将三人ありて下臈の名を
もあれども。依田大膳跡部大膳矢田大膳逸
大膳正木大膳穐大膳と弁ごとく成りきたり
名乗り名ハたゞ名ある人よりて善悪
をわきまへがたし。されバ此の名多く流えバ
中おもいもちいずして出ありぬれバしや
そろなさも出なかりし。故に世多年八と名付
人ありし。此人ハ家康公三河長篠にまで
時の長臣なりしも北條國みなれ弓矢をとれ
ても世の人たり。此年八合戦のさわぎにとえり。

馬上に鑓をとつて真先にすゝみ。猛威を
ふるひ。家来すくなしといへども平八は平八と。
名をよばゝり千騎万騎が中へ切て入といへども。
平八と云名をきゝておそれて退却し
し面をむかふる人なし。敵梁傳によく陣
をとる者は名をうるといへども。よく戦ふ者は死せずとも
そのへるも云といへども。平八と云名天下
にかくれなき。威名なれば。敵も味方もは
がくしたりし家。長兄に讓る一名。末代
までの名誉なりしきとかしきたの名もな

まれなる人の付給へば名も威光ある人の名は
かなはざるにはしかず。略意也。されども名とわ
らしもそのゆゑとしかしど

○東國山崩に狼煙を立る付大伴黒安事

見しは昔北條氏政と。里見義弘戦ひある。
相摸は氏直。下総は氏政の領國。安房上総
は義弘の持國也。此二ヶ國の間に東西へ
長さへ海ありて。敵味方の船の渡海たやすし。
三浦之水海と。上総の富津乃洲崎の間。
わづか一里なる。塩の満干なき事。矢を射

ことがごとし。去程によのかう下りしの世と成て、氏政
ふ来て塩ざうひを訴へ、世とのたゝかひに
軍船に作りて、船いくさ有べき事たり。
氏政の兵船ハ三浦三崎に置て、舟を
なし、義高の海賊、或時ハ一艘二艘にて
夜中に渡海し、濱辺の在所をさわがし、或
時ハ数船をもよほし、俄に来て浦里を
焼払、又三崎へ付けて、舟と共ともに
生捕をおそれしが、度々海もさわがしき
山ふかくに薪を取、又貝蛤を取

し人守居て、敵の舟来るを見付、火をたて
貝鐘をならせバ、山嶺に火を立つゞけ。此時に
三崎へ知らせハ舟を乗出しても、是を取はかりごと
名付、昼ハのろしとて、昔し三国に限らず関東
諸国にもあり。炎日燧火を定とさ。其の縁
来者も和圖に見る事あり。狼の毛書を求
とさ。是を日中にハおしへ中にかへる時、煙空へ
高くあがる。褒姒が狐狼野干となりし事
細まると。俗にいひ伝へ、今ハ国治り
うちなるも人もしらされバ、其の代にありけし

敵も若生ありなどよめる常のもとなるせとも
逆乱起りぬれば若此炎やゝてのゑしれ事やゝ
も侍べきといふべきなる人ゆゑ〳〵関東の御治
事もなるべし。二十余年弓矢治て当代の
若此炎たつべからもど。狼煙と書てのろしや
よむるれば狼の子細なるべき事也。叉烽火
と書てかゞりともなぶ火ともよめり。むかし大
国より戎夷わり胡敵をとゞろがさんとて軍兵
を召明ながなしもぞ烽火と上る夫が明松に火
を付高き竿にさてげさもせば烽火自の

人見をりんて〳〵四方出る〳〵厳くゆるしけれ。一月
行き着る、も五日の内にやゝ軍兵も世来る。是
をもつて烽火とよう。古語に
驪山の烽火とわくは褒姒なりと。総之
周幽王は烽火にわやまりてからひぬ鐵鉤に
も異国の例をも思ひ給ひけりや。素良の御
門の時分なりゝくさ。おきなんとせしが春日野
なふ火を立ることも火をもちる人を守
きてなりまりよけて。春日野をとぶ火野と
名付。古今集あり

一 其日船のうかぶ火の船ある事かく見んよしハ、古
へくわりて若菜浜にて、しく詠せり。或人云
て、舟の上に舟をうかぶ火あり。淡路ハ淡路の島を
かよふ小舟、飛火を立るそれと見てくるたびに
とも舟のなりと、是を志るしの烽と哥によ
めり。組屋ハむかしの事也と、古老によし注せり。
さるに今も此義あり。先年年一家五郎
舟、三浦崎より伊豆の国へ渡海す。此海わ十八
里あり。大事の渡り也。順風に帆をかけ、惣舟
おかけ出し、海中半に風吹たえ、又吹出る

ことハ、先院に夜に入、渡風わたる行先を見にうかぶ。
爰に至ると、舟一艘。飛火を立る。我が家の子に
舟を夜に舟の作法と、苫を続松とし、是さ火を立
爰百艘計の舟をかくして、前後左右に
火を立られ、先船の火を志るしに海路を一筋
に夜中に伊豆の国の湊に着なれば、うかぶ火の
事、軍法に用へきと、舟の上に舟もなき志るしなり
夜又前に注せる三浦崎之水に付て、おもひ出せり。
此岩下ハ山わひに入江ありて、塗の枕に用ゆる事
其ありわり。物を業として、遠く命を送るなれバ

古今の注に大伴の黒主が哥ハそのさまいやしよ
きハ薪おへる山人の花のかげにやすめるがごとし。
此人ハ志賀にすみし時ハ志賀の黒主といふ此人
の先祖ハむかしなりしが倭武尊にハ景行天皇の
波の國へ行幸ありし時逆風にあひ給ひて三浦
のはし里水と云所に着給ふ海岸のかすかなる庵
に住けるに蛤の膾を供御にそなへ奉る雑さ
味かなりしに御門叡感ましませ給ひて此主を立新
をもてこの時姓を大伴とぞ下されて都へ供
やて大伴の黒主となりしがなるとかや

鴨の長明東國修行後次の記に江州境乃宿に
到りぬまさばむかしの翁乃出あひて物をいひ
さひていしかる哥の中に古今集に
かゞみ山いざ立よりて見てゆかん年へぬる
身ハ老やしぬると大伴の黒主が哥ありしかハ
まことにもその所に出てかりしかとたなを
もたらかしといふべきなりて打わなくと言書て
立よりて見ハ名ん鏡山年の翁の影ハ
見えねども詠ぜり。伴乃海人ハ黒主天上に住へ。
哥人の名をうるりし仙地よおりの蘿のしる

其ふうやう雲井よのがうことれしもでや

○北條家の軍ふ貝太鼓を用ゐる事

中比むかし武士抱浪せられしハ北條早雲氏
其子息氏綱。二代の軍ハいふに及びね以後三代
むくもとの合戦よりとれわひそれぞれ大ね軍。
戦場よ出て。或ハ団扇をもて士卒をいさめ。或
ハざいをふりて下知せらる事。かんろ并ね古今
の例ゟ。扨又小田原北條家の軍よ。貝太鼓を
高く用ゐる事。進退よ諸卒お心揃を一同
し。いさゝとせニともろが故也合戦篇を乱そ

時節ものけ貝をもて。円太鼓の鼓をも用て。至
卒お善悪を捨て退さ。鉦の鼓をもつてハ。三二
ますゝむていまハ軍ハもとむ計ゟ紀すもわる
を退くとてもわしさよ北もを勝て負るのあ
里負て勝事わり。鉦引武略ハ。大ねの心よわり。
陣取の事。旗并を中ふ。諸勢前後れたおり
旗をも一よを備へ家大ねの陣場。東西南北ふ備
て遂違して旗の取るよ混なし。一旗の旗よ也。
旗とかお出よ立よをつけ。逆茂木とゆひ旗ハ
纏を旗。旗かの大よよふ矢倉をかけ。貝太鼓を

時に一番の日打立るには。先ツ八ツ太鼓を撞て。旗
本に一番貝を吹ことを吹て出陣貝吹ば。おさへ
衆等も七ツ太鼓に二番貝を吹。出陣貝吹合す。
六ツ太鼓に三番貝吹。出陣貝吹打立すべく軍
中にをいて士卒おのおのをたがに遍く下知すべし
真貝太鼓の数ちにてハなし。相模大山に
宇善坊と名付山伏薩摩と号す也。大貝一ツ
持てり山伏より別に吹者なし。五十町へひゞく。
民出陣の時ハ大山寺より山伏来り。旗本て
立て貝吹合りも其子孫貝吹とり。然るに

大将たる人ハ団扇を肘にかけ。貝をもて付たる也
乃妻手の脇にかけれと付給へり。合戦負たる時に
又くハ。逆太鼓を撞貝を吹し軍兵をあつ
むとぞ。するも引も数度あるて。軍を乱さ
ず。敵味方対陣をする時。先手の役として敵の
ねき迄へ。さうひめへ出向て陣をもつるへ足軽ども。
五人十人ツヽ。ひかへても。夫軍をなす也。其ハ
下知を清くするにも。わかれぬ程は大将もなし
或へ前登をもすく者。或ハ若手の備中なと
一人二人ツヽえらんで。集て合戦をよせし時も味方の旗

かの貝太皷の聲を聞て急引返し勢を盡し
とみるまゝに俗よりおしゆきさへきるともわかてかたかたと
くみくらいさかひして月を投捨る駿河勢そ
我日せられの軍に敵も味方も二百騎つゝ出て
わのかけつゝ討つゝ首をとられつゝ乱れ戦て
敵ぐるしく草に討死するものは只さかゆるをとを見せ退
く味方へ草よわるを志てまゝかの門に家臣くすてゝゑ
あつまる将敵地へおしこむ時。とても小草のもの
ともかくして縄を取切。討んとも。味方はむかふ
手組よ月をかけ是を志てみぞのまゝ

遠よりかくて汎をそへ是を見てかけ貝を吹太
皷を撞それども乱れて下くさなれ是。引聲を出
て是を見捨て皆引ぬき城に籠りける口を遁れ
んとかく貝太皷の威勢を聞ずそちていましか
常の鑓は二丈一尺を用ゐると云伝ふる組是を
敵一人に対して益わりんの早雲よりもの也
此代の合戦ことを知をもつて敵をも味方も鑓
を持上下月の日本地をもつてしかしれども
是よりいて一戦なほ三尺鑓にしてへだてしと
これを用ひ来りかの陰家軍法流伝へかまし

らつて毎歳の次第かくの如くわかり。是上大将たる人ハ
八陣の図をうんがえ孤虚支干をおもと用ひ。兵乱
を見て軍を起し。扨又大合戦より常の軍法
ありり。人数の積をとりよそ。二陣よりかりてきさ
りしハ二陣よりきく前後数十町よ月を付。下知
しけれハたれ時刻よりも事に望んで定まりける
ろ。下総の国のあるり国府台合戦ふ氏康氏政父子
二手よりて敵方より多くハ。のも前陣たる
てつまるハ此合戦ハ永禄七甲子年。正月八日申の
刻也。是とうんがえる味方ふ一ツとりて有るなし。

甲子ハ殿の紺が十ヶより是より他国へ打越。申の刻
ふ至て。軍を起し事。是二ツがらの大河
を越。しかも若干なる是三ツ。辰の刻の戦ひ
ハ味方打負ぬとされとも。敵ハいさかひとえる
まま。是より殺良の合戦より軍兵貝太鼓の声を出
ていさみすすみ見る是を教えず。これより
まさへひともゝへ不郷より。郷と人々をちより
汝らハも不から。抱九の武者謀り来ていさく。義弘
打て甲冑をぬくとあるゝ氏康氏よりをせめ
強敵ととゝ古ものいさめを貯んとぞりける候

迄も華どし。貝太鼓をもならさず。敵陣ゟ
くつをしよせ。困苦をわけ。第二に責かゝり。勝
利をえられなかりしとかうんば。氏政諸将と
常にかたりしが。ふる敵におゐて勝軍をと。知れ
かりとやうされし

○大亀陰へありし事

やすしいひし。関東安房上杉憲政と。小田原の
氏康とは年久しく不和なる事なりし。然るに古方
晴氏公上杉と一味し。天文十四年の春。武州
河越へ氏康が城を。大軍をもつて取囲め。
東将侍も共とゞく一味まで。氏康に要樹の合戦
かなはざりしで。あり年数をとめられ城中三千
余人。籠置者たれ兵粮尽。既に餓死に望むに
附る。氏康城中の者ども。命たすかりとなきけ
ちうてみをとて城をわを渡すへき旨。和平を
通せられしへ。皆打果すへきと。いさど[illegible]小紙を
難義にとゞまり。氏康只上の合戦し。置を天下
まりせ前をとなさせんと。おもひ定めらるて。小
まいて。伊豆の箱根。あ不捨現。三嶋大明神へ。御
祈誓の義あり。通今念八幡宮にをとて。如意擣

の秘法を修せられ。別して当所。松原大明神。宮
寺あまた。護摩を修し。善行を尽し給ひぬ。
然るに。同じき年二月廿日の日中。大亀一ツ。小
田原浦。真砂地へはひあがる。町人是をとらへて
こゝへ持来り。松原大明神の池のうちにはなちぬ。八
人がかりにて持はこびぬ。頃は世民康にして。大亀陸
地へあがる事。国中の瑞相なりとて。即刻宮
寺へ出されて。亀を見給ひ。御心よく。天下
泰平なるべき前兆にはある歟。甲出現する。
唯古の吉例にかはりし。是ひとへに当国家平安の

嘉瑞。以て神明の示現なれば。幸なりと。御
祝を見せ。亀の甲の上に是をなさしめ給ひ。
それ亀瑞と云事は。あらはれて。隠居ある
主君出座。これを祝はれて。国恩なりとぞ。
竹葉宴酌をもよふし。一家一門ことごとく。来
集列座し。盃酒数献に及ぶ。万歳の祝詞を
のべ給ひて後。件の亀を大海へはなちかへし
給ひければ。海へぞはなちける。亀は小田原の浦
をはなれまじきとうかびて見ゆる。廿二日は松原大
明神の御前にいそぎて。宮座の夕にかゝる

くの能七歳わりしハおさめまは宮庭の大史官人出て。
太平楽とぞ舞納ける。宮ハ人ろうくいはく。
是ハ目出度いまれわり。伶人舞童と云ハ児宮
人して舞ふ也。是を太平楽といふハむかし漢の
國ハ王ましはしを名をハ高祖と申せしが。わう
びハ楚といふ國わり。王の名ハ項羽と申し。或
時高祖の。項羽の内裏へ行幸わりしハ。太平
楽とまひふ舞楽をあそばし人とのけ。門をさ
して項羽と高祖と又項羽の臣ハ。項荘と云ふ
者とかし念せられみられと巳上三人ニて之の

海と也さわく悪魔がうつくりゆんまいと
皆して舞をもやさせて舞ふ。是志し
かしこ項羽の高祖を討べきとのもりこ
と也。門を閉て人を通さず。門外に
高祖の兵ちんくいと云者は舞を護す
しるかぶ忠の舞ハ加く死の位の舞わり
樊噲と云ハ今ハ帝王の命をやしこて。
鉄の門をとし破て。内へ乱り入て祖王の
方人の舞くく大功殊といふ海をゆき
おさく舞これハ項羽のたくみしことも叶ハず

も時より栄平楽は宮人にかなひたり。今
の世に舞踏ふも是なり。要雅とあらふ
ゆゑは栄平楽にあてたり。宮人にて舞
是宮方の夷を切んとし。又外中をといふ云
楽。此時より始られり。外に中をといふ合戦
よりすぐれたる。鎮くわい云といふこれもの門
外に居に。何とも勝負を決せんと
もなき事を仕出し。坂人の明とかれり
深闇に望んで蓄馬をかむといふ事
是也。文選の表堂に奥にみへてこそあり

ごとく。同廿六日氏康。軍兵を率し。武州へ
出馬。河越の地へ着し也。天文十五年四
月廿日。午の刻より始まる。合戦し。氏康討
勝て。公方晴氏公。上杉憲政を追討し。
猛威を遠近にふるひしかば。関東諸侍。
ひいきかひよりをそれなびくごとく氏来
て。幕下に付ければ。此一合戦に。関八州をお
さめられたり。猶もってさわり。此亀陰へわづ
かに三月廿日の日中也。此合戦高四月
廿日午の刻なる。日刻甚だ差の甚るし

わすれざると皆人へ是を感ぜりされば
先人へ申てむかし漢土にも照且鏡といふ鏡
ありし此鏡ハ裏より表へかよひてうつる。是等へ
の吉凶能鉢の雅亀をうつる鏡也。たて
まへ二尺ありしを世に是をいふ十寸
のかゞみなり。鉢の鏡を亀背へ陸へ上る
其頃ハ鏡のうち毎に亀を鋳付り此諸
なりしハ亀鑑と書てかゞみとよむ
事此紋ハ是にて民康鏡を甲の上
に紋て覚し語ひ給ふ。極又いくさに付て

右にそなへたるもまたわかちむかし源平藤平家
討負ける門の国へ落行ハ文治元年に至く赤間
関の海上にて軍船をこしめ戦ひまさる数月を送
る初大亀一ツ陸へ上る。海人これをとらへて。源氏
の大将軍。参河守範頼へ奉る。参河守ほ流布んじて。
是ハ吉事也と。制禁を加へことに札を付て蒼海
にはなされけり。如此に赤間関の海上にて源平争う。
其船をとらへ勝負を決しべさ。同刻をとうじに
同年の三月廿三日鉢の大亀源氏の舟の前へ
うかひ出て是をとり。源氏乃大将是を見

給ひ。七日雌雄を定もべさ。亀のつげよさてく〻ハさて
もとんで合戦も。源氏討勝て。平氏をほろぼし
給ひし。安徳天皇も海底に没し給ふぞかし。それ
よりこのかた天下太平。海内の万民ゆたかなり。
亀ハ万歳の生ある物にて。千秋の寿の数ある
五岳の説ハしるしをみれバ。蓬莱の亀。海中より涌出
して蓬莱宮に現じたまひしも目出たきためしある
事なり

◎童男丸飛法昔に語る事

凡しきむかし関東におハせし武士の子細ハ

土あり。きやうどといふ名付て。髪を梅のごとくふたつ
結てかの首の上に。一所にゆひし也。名をバ菊子
代梅若丸とて。付ば九ツ十の比より。父相
ともに山寺へのぼりてもくろをし。手習学文に
さく。其ハ花の色香にふれ。秋ハ月にむかひ
奇双紙を翫ごとすべし。父母さまを
かりし。尾なしこさ道とのこぶふかく。念仏事に
どの嫌るとハなりし。一日不食なとと見ければ
云葉にいひ出も事と。猶具になりし給へり。
師匠のもとへと参るよそうしるをなにわれも

ねどもおもしく人に情をかけ。何事も芸能
よくなおつて候らしかかなせかり。湯風呂に
へ行ハ白き脚布を腰にまとひてもはや
凡そる事をもちかつれこやびをなんし給ひね。
秋月の折ふしハ多くの風流。月を詠み腰をしめ。
わかがましきる若衆たちの服を流しし腕をひく。
京極くのうちくひなかりしとさて洒落なる事共
ましてまれてわきたりやと。書物し侍りけり
三井寺の桂海律師ハ。梅若丸といふ児に恋慕
しけるを候つし事。秋の夜長物語に

記せるも今の世にてぞかかる事のあれば若衆を
むかしハさやうの人ぞ一生涯のちぎりをなし
給へりし北條氏政公遠州にて田村民部といふ人の子
息にて千松丸と云て十二歳になる若衆。容儀さ
ぐれたるに心ひかれ候ひしが天正十三
年の事かとよ千松丸と若き侍と衆道の契合
あそびける時信山吉十郎と云人千松丸をとかり
うけさといひたれども芸能をもち。楊枝をくわ
と云て小刀をとり。腹に当て果給ひぬ吉
十郎是を見ても袖もかわしやがてかれに

やすかりつかやうにあるべしと。殊にも又面目な
しとて則庭にて腹を切。板垣三郎松井八助
といふ人。此結合を見て千松が自害し給ふ。
うちのおもてを恥ぢひて世を捨りてひそ
まじや。殊人にむかひて腹を切。其庭に人果る
是ぞ見みな義理故の命をうしなひ給へる事。
あはれなる結合されとぞ人々申人。波を流し。識
ぜる者ハなかりけり。当世ハ君道にまよひ腹切人
おれり。是等ハしへなきさおしもおもへど。漢の帝王
の文をしり人の。董賢と云てすぐちゆうなる寵
子あり。帝是をいつく寵愛し給へり。朝政の後。董
賢といひしを切。黄泉の御幸の供奉せしも。
あはれ也。然に関東のむかしハ大人も小人も十五
才なれバ名を付。元服とて烏帽子の上にて結。
其二六日をとさす切さけ。是を以て額を付。
地なれバ三十までも中ゆ。男と云し也。又唐
国のおさあい人ハ髪をゆあつれのうちて
やうしらの上より二つ三つにゆふ。是ハ総角
の童子とハいへり。かし緑なとも見えたる
乱れを以て人生れて十五年を細といふ。

ちぢめく字文も。二十を弱として。錦ハ白
しそよむ所なり。其より内を童子と云く。二十
さかりて冠をとらり。自分なくハ。髭をと元
服と渲ざり。然るごとくんば関東。おさめし人の
絶えず。国とまするりや。横みえ元年関東
乱國以後。関西諸國ぐんみく。東國へ打ちへなまふ。
おさめし人へ是を見るに。角びくいふ中ぞうし
た髪をみじくこらる。是にれのごとく海老なる
おゆへ。名を七九郎兵衛十郎左衛門。藤戸守。
兵庫助などいふ付寺に出て。やがて。ふ楊枝

をのがどやみりけむぞんの年て。食事しければ
なりひの側はわひふ卓の上によそ縁たんとき。
算勤のくを是となし。銭金の利倍を
浮んしがしらを打てなどをもどき。利
口をつひてござりし。根鏡なり。関東にハ
是をとりて上ざるの諸流遊べ。よの時は付て
座さりげもなしかくゆげもなし。此人だ。
又うぞる流は。関東のまし又北ハ。当世の風
流とおもどがなりけるにもぐみてるをぞ
なしといひく。笑ひ子なれば。今見れば関

東のおさハ人々生も、いなかへのこゝちを打捨、くんぜい迄もみな関西の風俗をまなび給へり

北條五代記巻第八終

110X
231
10